論　文　内　容　要　旨

Changes in patient-perceived aggravating factors during the course of atopic dermatitis

（アトピー性皮膚炎の経過中に患者が感じる悪化因子の変化）

Journal of Cutaneous Immunology and Allergy, 00:1–6, 2023.

主指導教員：田中　暁生教授
（医系科学研究科　皮膚科学）
副指導教員：高萩　俊輔　准教授
（医系科学研究科　皮膚科学）
副指導教員：柳瀬　雄輝准教授
（医系科学研究科　治療薬効学）

柳田　のぞみ

（医系科学研究科　医歯薬学専攻）

【背景】アトピー性皮膚炎(AD)は、適切な治療によって長期間皮膚炎をコントロールすることで「寛解」が期待される疾患である。しかし、患者の生活環境やライフスタイルによっては、湿疹が再燃することがある。そのため、AD の治療においては抗炎症目的の薬物療法に加えて、悪化因子の対策が重要である。患者の自己申告に基づく過去の疫学調査から、多くの AD 患者に共通する悪化因子として温熱、発汗、精神的ストレス、食物、ダニ、ハウスダストなどがあると知られている。しかし報告はごく少数であり、更にこれらの報告はすべて他国のものである。社会的・文化的なライフスタイルは過去と現在で変化しており、悪化因子の多様性と頻度も変化していることが予想される。悪化因子の種類や頻度は時代や地域によって異なるため、適切な対策を講じる必要があると考えられる。AD の悪化因子には、経皮的または経気道的な物質曝露などの外的因子と、感情的因子などの内的因子がある。皮膚炎の改善に伴いアレルゲンは皮膚バリア機能を通過できなくなるため、悪化因子として感じられなくなる可能性が考えられる。アレルギー関連の悪化因子およびアレルギー関連の不安は、心理的負担であり、軽減されれば治療アドヒアランスの改善に役立つ可能性がある。AD の増悪因子に関するこれまでの研究では、患者が一定の時点で増悪因子と考えるものに焦点が当てられてきた。患者の報告が経時的に変化するかどうかについては調査されていない。悪化因子が患者の皮膚状態が変化するにつれて変化し、このことが治療アドヒアランスを向上させることにつながるならば日本人 AD 患者における現在の悪化因子を特定しどのように変化するかを理解する必要がある。

【目的】１、日本における AD 患者の悪化因子の頻度を明らかにすること。２、AD の悪化因子が治療経過中にどのように変化するかを明らかにすること。

【方法・対象】当院の AD 患者 115 名を対象に初診時にアンケート調査を行った。そのうち 36 人の患者に 6 ヵ月以上の治療後に再度アンケートを行った。アンケートの回答選択肢は既報を参考に食物、ダニ、ハウスダスト、花粉、発汗、環境因子、ストレス、睡眠不足、ペット、その他とした。AD の重症度評価は２人の医師によって、患者の臨床症状、写真、カルテ上の診療情報から決定した。アンケート結果に関する解析はカイ二乗検定を用いた。対象の重症度（IGA）別の人数は IGA２：22 人、IGA3：45 人、IGA4：48 人、年齢別人数は 3～15 歳：23 人、16～49 歳：74 人、50 歳～：18 人であった。

【結果】

まず、115 人を対象とした初診時のアンケートの結果について、初診時に悪化因子と答えた患者の数は、発汗が最も多く、次いでストレス、ハウスダストが多かった。年齢ごとにみると 15 歳未満では他の年齢層よりもストレス（5 人[22%]）が有意に少なかった。重症度ごとの解析では、皮膚炎の重症度による各因子の回答者数に有意差はなかった。次に 6 ヵ月以上の治療後（再診時）に回収したアンケート結果を 36 人から回収した。初診時と再診時における各増悪因子の頻度を比較すると、食物、ダニ、ハウスダスト、花粉、ペットを悪化因子とした患者の数は、治療中に減少した。再診時の皮膚炎の重症度別の悪化因子の頻度については、皮膚炎の重症度に関係なく、食物、ダニ、ハウスダスト、花粉、ペットなどの外的因子を増悪因子として認識する患者の割合が減少した。ストレスと睡眠不足は重症度によらず有意には減少しなかった。

【考察・結語】

今回の調査で、本邦における AD の悪化因子の頻度が明らかになった。調査した全因子について、答える患者の割合に症状の重症度は関係がないことも分かった。再診時の調査では、AD 患者の 47%で悪化因子の数が減少していた。皮膚炎の改善により皮膚バリア機能が回復すると、アレルゲンなどの外的悪化因子の皮膚への侵入が防がれることから、皮膚炎の改善により外部悪化因子が減少すると推測されたが、今回の調査では再診時の IGA に関わらず悪化因子の頻度は減少していた。悪化因子に対する適切な対策は、患者が認識する悪化因子を軽減するのに役立つが、発汗・精神的ストレス・睡眠不足は患者にとって対処が難しい可能性が考えられる。AD 患者の多くは悪化因子を意識しており、治療中に悪化因子が変化する可能性があることを患者に伝えることで、悪化因子に関連する不安を軽減できる可能性がある。したがって、初診時だけでなく一定期間ごとに増悪因子を聴取し、対策をとることが必要である。